

特集

職人 しばたの

城下町四百余年の歴史のなかで、

多彩な職人文化が育まれてきた新発田市。

職人たちは、

自らの技能に誇りをもち、

実直に腕を磨き、

ものづくりの喜びと苦しみに日々対峙しながら、

連綿と続く伝統の技を守り続ける。

百年先も朽ちることのないものづくりを続ける、

その気概、その熱さ―。

人の手が紡ぎ出す温かさと確かさは、

私たちに本物の価値を教えてくれる。



1
2

1) 昨年から十二支をモチーフにした作品づくりに取りかかっている。昨年の龍に続き、今年は蛇を作成中。「毎年一つずつ作っていきたいですね」。

2) 琵琶を抱えた蛇の置物を手本に、自ら原画を描く。「孫に『おじいちゃん、絵描きさんみたいだね』とほめられました」と目を細める。

3) みごとな鬼飾りの付いた棟。神社仏閣の修復工事も数多く手がける。

4) 店舗正面の看板の上には、新発田市章の五階菱が付けられている。「食と職のおまつり」の際に制作したものだという。

5) 作業場には使い込まれた道具の数々が並ぶ。



3



4



5

Data
 (有)上杉ブリキ店
 新発田市五十公野2366-3
 ☎0254-26-1154

板金職人 上杉 幸雄さん



寸分の狂いも許されない模様細工。亀甲、菱形などの幾何学的な文様に鶴や亀などの縁起物を飾って仕上げる。表面からは釘の頭はまったく見えない。

現代の名工が紡ぐ、大正浪漫漂うブリキ細工。
 【(有)上杉ブリキ店】

新発田市五十公野に仕事場を構える上杉ブリキ店。亀甲、菱形、麻の葉など粋な小紋柄の模様細工が施された大きなブリキ製の看板が道行く人々の目を引き付ける。

大正から昭和初期にかけて、店舗の正面に銅板を貼り付けた看板、建築や、雨戸を収納する戸袋など、和洋折衷のレトロな雰囲気銅版装飾が多く作られた。先代店主である上杉さんの父親は、大正半ばから末期にかけて新橋で修業し、こうした銅版模様細工の技術を身に付けて新発田へ戻ってきたという。父親に手ほどきを受けた上杉さんは、今も模様細工を作ることできる数少ないブリキ職人だ。細工の模様に合わせてカットした銅板を一つ組み合わせて釘で打ち付けていく模

様細工は、パーツの寸法が少しでも狂えば完成しない。まさに職人技だ。中学を出るとすぐに父親のもとで修業を始めた。8人兄弟の長男。小学1年生のときに戦争が始まり、進学したいという希望はかなわなかった。昼間はブリキ屋の仕事を覚えながら、夜学へ通う。冬の仕事のない時期には東京へ出稼ぎに行き、新しい技術を学んだという。

新発田絵鎮守の諏訪神社の再建をはじめ、神社仏閣の修復も多く手掛ける。二面の屋根が交わり稜線をなす棟と、その先端を飾る鬼飾りは腕の見せどころだ。「孫には『神様仏様の雨漏りを直しているんだよ』と言っています」と笑うが、卓越した技術が認められ、「新潟の名工」にも認定されている。



「日本人は、美を追求することに関してはとても貪欲だと思いますね。刀も、つばや金具など細かいところまで装飾が施されている。美しいですよ。」

刀の柄に施された装飾を「目貫(めぬぎ)」という。「めぬぎ通り」の語源である。ほかにも、「そりが合わない」「切羽詰まる」「元の鞘に収まる」など刀から生まれた言葉は多い。刀が日本人の暮らしと強く結びついていた時代の名残だろう。今、日本刀を見る機会は減ってしまったが、家を解体するときに、戦時中、供出を避けるために隠した日本刀が壁や床下から出てくることがあるという。また、昔、旅の途中で食事の代金がわりに刀を置いていく武士がいたので、今も街道沿いには刀が残っていることもある。



Data
高田美術刀剣研店
新発田市中央町2-4-14
☎0254-22-3040

刀剣づくりは分業。刀鍛冶が刀身をつくり、それを研師が研ぐ。さらに、鞘を作る鞘師、はばきや鏝(はき)などを作る白銀師、柄に紐を巻く柄巻師、鞘に漆などを塗る塗師などの手を経て、何か月もかけて完成する。なかでも研ぎはもつとも

を感じるといふ。刀剣づくりは分業。刀鍛冶が刀身をつくり、それを研師が研ぐ。さらに、鞘を作る鞘師、はばきや鏝(はき)などを作る白銀師、柄に紐を巻く柄巻師、鞘に漆などを塗る塗師などの手を経て、何か月もかけて完成する。なかでも研ぎはもつとも

「刀と向き合うときは真剣勝負。神経を張りつめていますね。1000年以上も脈々と伝えられてきた技術ですから、私などはまだまだひよこ。「生、勉強です」。頼もしい4代目として、今、息子さんが修業中だという。」

カーテンを閉め切った作業場に、裸電球が二つ。その明かりだけを頼りに、日本刀を研ぐ。刃が砥石をこする音だけが響き、息詰まるような緊張感が伝わってくる。「蛍光灯の光では乱反射して仕上がりがわからない。40年ずつこのやり方でやってきた」と語るのは刀剣研師の高田さん。父親は柄巻師、祖父は鞘師。代々伝わる刀剣師の3代目だ。数百年の時を超えて伝わる刀にロマンを感じるといふ。

【高田美術刀剣研店】

精魂を込めて、日本刀に輝きをあたえる。

大切な工程と言っている。刃紋がきれいに出るかどうかは腕次第。曲がりや凹みの二つを見ながら、気の遠くなるような時間をかけて研いでゆく。刀が良くなるも悪くなるも研師の腕つだ。

「現代刀は鑑賞して楽しむもの。小さな傷つないように研ぎ上げなければなりません。刀は埃を嫌う。小さな埃でも傷つくため、荒砥(あらぞり)粒子の荒い砥石を使った後は、全身を洗ってからでないといふ。刀には触れられない。「刀と向き合うときは真剣勝負。神経を張りつめていますね。」



- 1) 文化庁主催の研修に参加して初めて刀をつくるための専用道具があることを知り、あわせて三条の鍛冶屋さんに依頼して作ってもらったカンナとノミ。
- 2) 奥様に頼まれて作ったという守り刀。奥様の好みで黒地に桜と蝶の文様が浮かぶ美しい仕上がりとなっている。
- 3) これまで制作した作品の数々。鐔(つば)や金具など細部までこだわった作りはまさに芸術品。腰に差したときに相手から見えるほうに家紋がついている。
- 4, 5) 自衛隊のレンジャー部隊にいた頃から作り始めたというカスタムナイフ。今も全国から注文が絶えない。



Data
 鞘師 佐久間保男
 新発田市五十公野4986-3
 ☎0254-22-9950

鞘師 佐久間保男さん



「12年間研修を受けましたが厳しかったですよ。一子相伝で技術を受け継ぐ家柄ではないので、どんなに怒られても教えてもらえることが有難かったですね。」

刀剣のもつ美しさに魅かれてこの世界へ。 【鞘師 佐久間保男】

自衛隊出身という異色の経歴。新発田駐屯地に転勤になった20代の頃、刀を売る店があると聞いて高田美術刀剣研店へ。ところが先代の店主に「おまえのような若い者に刀は売れない」と蹴られる。持ち前の負けず嫌いで毎日店に通い、2年目によりやく1本の脇差を売ってもらった。「立派な刀でした。良い刀を持つとそれを作り替えてみたいという欲求が生まれ、自己流で鞘を作ってみたんですよ」。鞘のみごとな出来栄えを見て驚いた高田さんが推薦者となり、文化庁主催の研修会に参加。鞘師としての道を歩むこととなった。

鞘は刀を納めるもの。きれいに砥ぎ上がった刃に傷をつけるわけにはいかない。「鞘と刃が当たらず、宙に浮いている状態がベスト。当たる箇所を最小限に抑えて、当たっても錆びないように作るのが腕ですね」。材料は杣の木を使う。湿気に強く、強度はあるが硬すぎないため刃を傷めず、漆塗りなどの仕上げにも適している。標高1500〜1800メートルに育つ天然木を伐採し、板状にスライスして5年間寝かせてから使う。年輪が詰まっているため寒い地方の木が好まれ、ほとんどが北海道産だという。

「代々続く刀職人の家柄ではないが、刀の美しさに魅せられてこの道に入りました。日本の伝統技術を守り、伝えていきたいと願っています。私の作ったものが後世に残るなら、それが職人としていちばんの喜びですね。」